

J **apanese text**

2018年 春/夏号 日本語編

伝統工芸

**[ギンザタナカ] 日本の手仕事、その真髄②
——職人技が生む祝いの兜**

p.031

男児の健やかな成長を願う、勇ましく美しい兜

撮影=中村 淳 (静物)、渡部俊介 (取材)
スタイリング=阿部美恵 (静物)
文=編集部

p.030

日本では古来、5月5日を端午の節句として、男の子の誕生と健やかな成長を祝う風習があります。貴金属で日本の伝統工芸品を作り続けている「ギンザタナカ」から、端午の節句を彩る美しく勇壮な兜をご紹介します。職人が一つ一つ手作りで仕上げた、祝福の思いがこもった逸品です。

31 ページ上の商品の価格は 2018 年 1 月の相場を参考に、金小売価格 4800 円/g(税抜) で計算しています。金相場により価格が毎日変動します。

(p.031)

左ページ：金銀工芸家・伝統工芸士 二代目 故・関 武比古 (せき たけひこ) 氏による純銀製の兜。まっすぐ伸びる剣の前立には、邪気をなぎ払うという意味合いがある。男の子の健やかな成長と躍進を祝う兜だ。純銀製兜「剣」(SV/本体高さ約 20 × 幅約 16.5cm、ガラスケース付き) 18 万 7963 円/ギンザタナカ

上：金工芸家の大淵光則 (おおぶち みつのり) 氏の原型による純金製の兜。天を指す剣と、獅子の頭部をかたどった勇壮な獅噛み模様をあしらった前立が見事。細かく編み込まれた縄を表現した鎧部分に匠の技が見て取れる。純金製兜「大鎧」(K24/約 355g、高さ約 25.5 × 幅約 11 × 奥行き約 8.5cm、ガラスケース付き) 398 万 4000 円 (参考価格) /ギンザタナカ

下：兜は身を護るものの象徴。この作品は権力や豊穡のシンボルとされる龍を前立に戴き、弓矢や太刀などの装飾品も凛々しく力強い。幼子の輝かしい未来への願いを込めるにふさわしい、堂々とした風格が漂っている。純金製兜「龍」(K24/約 40g、高さ約 7 × 幅約 7.5cm、ガラスケース付き) 53 万 7038 円/ギンザタナカ

ギンザタナカは日本が誇る貴金属のオーソリティ。創業以来、“貴金属で新しいものを生み出そう”と様々なことにチャレンジしてきた。工芸品部門もその一つ、なかでも男児の健やかな成長を祝う「端午の節句」(毎年 5 月 5 日) に飾られる兜の制作には、1970 年代から積極的に取り組んできた。長年制作を手がけた金銀工芸家・伝統工芸士の二代目 故・関武比古さんは生前こう語っていた。「それまで我々の工房では宝船や扇などの制作が中心で、兜を作るのは初めて。昔の武士が身につけていた本物の兜を見たり、文献を調べたりしました。節句を祝うためのものですから、その思いが込められた姿形であること、日本の家庭に飾るのに最適な大きさであることも大切です。兜の高さと幅を決めれば、使用する貴金属の量から金額が算出できるのですが、デザインと見た目と価格のバランスをとるのが実に難しい工芸品でした」。30 ページで紹介している純銀製の兜は関さんの作品。銀にしか使えない技術や技法を駆使し、小さな部品一つ一つにまで細工を施している。すべて職人の手で仕上げた、独特の風合いや色が美しい兜だ。しかも伝統工芸士の仕事は、同じオリティで数多く、何度でも作ることを求められる。関さんも多いときには年間に 800 台を制作したこともあるというが、それが結果として技術の継承につながった。さらにギンザタナカは、日本の伝統工芸の底力が凝縮されたその本体だけではなく、飾りに使われる正絹や袱紗も質感や色にこだわり抜いた。時間と手間とこだわりが生んだ“完璧”な形である。

銀のほかに金やプラチナを用いた兜も制作しているが、銀は細工が施しやすく、金は柔らかい、プラチナは粘りがあった加工しづらいなど、素材によってそれぞれ特性があるという。その個性を理解し、生かし、様々な工芸品を生み出せるのも、貴金属に関する知識や経験が豊富なギンザタナカならではの、あらゆる表現ができるからこそ、「何を作るか」が大きな命題となってくる。ギンザタナカらしいものとは? 日

本の匠の技を生かし、永く愛される工芸品とは？ 次世代を担う職人を育て、日本の工芸文化を支援するにはどうしたらいいのか？ そんな問いを胸に、ギンザタナカは常に真摯に正直に、貴金属工芸品に向き合い続ける。輝くだけではない、高価なだけでもない——美しい工芸品が日々の生活の中にあることが、暮らしや心の豊かさにつながっていくと、ギンザタナカは信じているのだ。

(p.032)

- ①前立（まえだて）／兜の正面の飾り。家紋や信仰するものを模して施されるもので、武士の願いや信条を表すものとされる。
- ②鍬形（くわがた）／前立の一部。左右に大きく張り出した装飾。昆虫のクワガタの語源でもある。
- ③吹返（ふきかえし）／兜の左右にあり、本来は刀や矢から身を守るためのもの。細工の見せ場でもあり、この兜では百花の王と呼ばれる牡丹を色鮮やかに描き出している。
- ④猪目（いのめ）／鍬形に開いているハート形の穴のこと。猪は猛然と前に進み、後退しないことから勇敢さを象徴する。
- ⑤天辺座（てへんざ）／神が宿るとされている神聖な部分。
- ⑥総角結び（あげまきむすび）／古代の少年の髪型に似せた結び方で、背後を守り生命の緒をつなぎとめる護符とされている。
- ⑦しころ／兜の裾を取り囲んでいる部分。赤い緞紐（おどしひも）は生命力の証で、悪いものを寄せ付けなという意味がある。

1. 銀の地金を規定の厚さに加工、24種類に及ぶ部品を形成する。
2. 各部品の側面を最初はヤスリで、次にキサゲと呼ばれる工具で削って滑らかにする。
3. ヤスリでついた微細な傷を取り除くため、鍬形と剣の部分を炭で研ぐ。この下準備をしないと、あとから研磨しても輝かない。
4. 吹返部分の表面に風合いを出すため、金剛砂（こんごうしゃ）を振りかける。これは荒しと呼ばれる作業で、熟練の技が必要とされる。
5. 荒しを施したら、華やかさと高級感を出すため金・銀・銅の溶解液で彩金仕上げをする。マスキングをして1色ずつ丁寧に。

6. 職人自らが作った治具（じぐ）で吹返にカーブをつける。厚み 0.7～0.8mm の銀を、手の力と感覚だけで左右対称になるように曲げていく。

7. しころ部分に風合いを出すための古美（ふるび）加工。銀を硫化させ人為的に黒くし、その後、水を含ませた脱脂綿に重曹をつけて、洗みのある銀色になるまで磨く。

8. 上中下 3 枚のしころを、正絹の緞紐で組み合わせていく。しころのカーブが均等になるよう、紐の張り具合を調整しながらの作業。1 日に編み込めるのは 4～5 台が限度だという。

www.ginzatanaka.co.jp/en/

※本特集に掲載されている価格は、原則として本体価格であり、2018 年 2 月 16 日現在のものです。